〔萬葉集十秋相聞〕問答

四具禮零、曉月夜、紐不解戀君跡、居益物、

〔伊勢物語下〕昔これたかのみこと申みこおはしましけり、山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮有けり、○中略夜更るまで酒のみ物語して、あるじのみこ、ゑひて入給ひなんとす、十一日の月もかくれなんとすれば、かのむまのかみの○在原業平よめる、

あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげて入ずもあらなん、みこにかはり奉りて、紀の有つね、

おしなべて嶺もたひらに成ななん山のはなくば月もいちじを

〔土左日記〕八日、さはることありてなを同じ所なり、こよひ月は海にぞいる、これを見て業平のきみの、山のはにげて入ずもあらなんといふうたなんおもほゆる、もし海べにてよまゝしかば、なみたちさへていれずもあらなんとよみてましや、今此歌をおもひいでゝ、或人のよめりける、

てる月の流るゝ見れば天の川出る湊は海にざりける、とや、

〔古今和歌集四秋〕題しらず　　よみ人しらず

白雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月

〔古今和歌集五秋〕題しらず　　よみ人しらず

秋の月山べさやかにてらせるはおつる紅葉のかずをみよとか

〔古今和歌集十七雜〕題しらず　　よみ人しらず

我心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て

〔後撰和歌集四夏〕夏の夜の月おもしろく侍りけるに　　よみ人しらず

今宵かくながむる袖の露けきは月の霜をや秋とみつらん